

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2025年度開講科目

(授業形態や教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

○必修科目

1文学部 04250031

堀江宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 A1+A2 金 3

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員を中心に、死生学の本来的なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践を取り上げる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

2文学部04250070

鈴木晃仁「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金 3

応用倫理という広い領域に関して、合計で11人の教員が、死、生、性、病、臨床、環境、ケア、サステナビリティなどについて講義をする。

○選択必修科目

3文学部 04250061

早川正祐「死生学演習 I」(病いの語りをめぐる倫理) 2単位 S1+S2 水 2

人間は、病いととも生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』=Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics*を講読する(訳本でも可)ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがあるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ(vulnerability)・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りがある一方で、ネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がある一方で、閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

4文学部04250062

鈴木晃仁「死生学演習 II」(患者の歴史と倫理 History and Ethics of Patients) 2単位

S1+S2 火4

患者の歴史と倫理に関する論文や一次資料を読んで議論する

Reading sources and studies on the history and ethics of patients and having a discussion

5文学部04250063

富澤かな「死生学演習Ⅲ」（死後観念の研究とその展開） 2単位 S1+S2 水5

死後世界や死後存在の観念は、人間がこの世界で生きて死んでいく上で、極めて大きな意味を持つものであり続けてきた。本演習では、東西の死後観念の歴史に論ずる文献の講読から、死後観念の比較研究を試み、その歴史的・現代的意義を考える。

6文学部04250081

会田薫子「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法入門） 2単位 S1+S2 火5

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、医学、保健学、看護学、社会学、心理学、教育学等の分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

7文学部 04250082

鈴木晃仁「応用倫理演習Ⅱ」（患者の歴史と倫理Ⅱ） 2単位A1+A2 火4

患者の歴史と倫理に関する論文や一次資料を読んで議論する

Reading sources and studies on the history and ethics of patients and having a discussion

8文学部 04250083

井口高志「応用倫理演習Ⅲ」（苦悩とケアの社会学(1)） 2単位 S1S2 木2

苦悩や痛みは個別の経験ですが、その共有や社会的な承認をいかにするか、それらへのケアや支援をどう構想するかは、社会学の重要な課題の一つです。近年盛んなケア論や、当事者の経験に重点を置く方法への注目はこうした課題に答える中で生まれてきています。本演習ではそれらの研究や、関連するより理論的な研究を読みながら、個人的経験と社会的なものとを関連づける社会学の営みについて考えます。また、講読と並行して各自の研究計画作成・発表等を通じ、問題意識から研究へとつなげていくことも試みます。教員の専門領域周辺（医療・福祉・障害・ケア・逸脱・家族・死生などの社会学）と関連する話題が多くなることが予想されますが、異なる関心を持つ人や他ディシプリンを学ぶ人の参加も歓迎します。

9文学部04250084

富澤かな「応用倫理演習Ⅳ」（歴史と宗教史） 2単位 A1A2 水5

「宗教史」というと、〇〇教がいつ成立しどう展開したかの経緯の記述というイメージがある

かと思う。しかし、宗教はそれぞれに多様な「歴史」を語ってきたし、その語りが他の宗教や別の論理にもとづく「歴史」の語りと併存したり競合したりする中で、新たな語りが生まれもし、そうしてこれまでに何層にもわたる「宗教史」の重なりが展開してきた。宗教学の語りもまた、その一部をなしている。本演習では関連する文献の購読により、その展開の一端を考察する。

10文学部04250085

井口高志「応用倫理演習V」（苦悩とケアの社会学(2)） 2単位 A1A2 木2

苦悩や痛みは個別の経験ですが、その共有や社会的な承認をいかにするか、それらへのケアや支援をどう構想するかは、社会学の重要な課題の一つです。近年盛んなケア論や、当事者の経験に重点を置く方法への注目はこうした課題に応える中で生まれてきています。本演習では、Sセメスターの議論を引き継ぎつつ、関連文献を読みながら、苦悩やケアに関する経験的な社会学と規範的な研究（ex. ケアの倫理など）との関係を考えます。また、講読と並行して各自の研究計画作成・発表等を通じ、問題意識から研究へとつなげていくことも試みます。教員の専門領域周辺（医療・福祉・障害・ケア・逸脱・家族・死生などの社会学）と関連する話題が多くなることが予想されますが、異なる関心を持つ人や他ディシプリンを学ぶ人の参加も歓迎します。

○選択科目

11文学部 04250041

会田薫子「死生学特殊講義 I」（臨床死生学・倫理学の諸問題IX）2 単位 S1+S2 水 6

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、実践家や研究者の発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が全国から多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実務家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

S期は5回の研究会と翌週等にディスカッション授業を行う。研究会はZoomで行い、オリエンテーションとディスカッション授業は対面で実施する（Zoom参加も可）。ディスカッションの回は、履修者の小レポートの発表と参加者同士の対話を軸に進める。

2025年度S学期の予定は以下のとおり。

4月16日 オリエンテーション

4月23日 小宮幸作先生（大分大学医学部呼吸器・感染症内科学講座 教授）

「『成人肺炎診療ガイドライン2024』の意義」

- 5月 7日 前回のテーマに関するディスカッション
- 5月 14日 清水千佳子先生（国立国際医療研究センター病院 がん総合診療センター センター長
乳腺・腫瘍内科診療科長）
「チーム医療と臨床倫理－臨床倫理プログラムの実装」
- 5月 21日 前回のテーマに関するディスカッション
- 5月 28日 阿部智介先生（医療法人慈孝会 七山診療所 所長）
「過疎地域で暮らす人を支えるために－生きかた・活きかた・逝きかた」
- 6月 4日 前回のテーマに関するディスカッション
- 6月 11日 北村温美先生（大阪大学医学部付属病院中央クオリティマネジメント部 副部長、
DEIイニシアティブ、腎臓内科）
「腹膜透析患者のpeer-to-peer ネットワークがもつ力」
- 6月 18日 前回のテーマに関するディスカッション
- 7月 2日 福村雄一先生（司法書士法人福村事務所 代表司法書士）
「ACPと切っても切れないお金の話」
- 7月 9日 前回のテーマに関するディスカッション

12文学部04250042

会田薫子「死生学特殊講義 II」（臨床死生学・倫理学の諸問題X）2単位 A1+A2 水 6
S学期に続き、臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、実践家や研究者の発表とそれに基づく対話を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」（オンライン）として一般に公開しており、医療・介護関係者が全国から多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修生・聴講生はメールアドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実務家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

A期は5回の研究会と翌週等にディスカッション授業を行う。研究会はZoomで行い、オリエンテーションとディスカッション授業は対面で実施する（Zoom参加も可）。ディスカッション授業では、履修者の小レポートの発表と参加者同士の対話を軸に進める。

A期は5回の研究会と翌週等にディスカッション授業を行う。研究会はZoomで行い、オリエンテーションとディスカッション授業は対面で実施する（Zoom参加も可）。ディスカッション授業では、履修者の小レポートの発表と参加者同士の対話を軸に進める。

2025年度A学期の予定は以下のとおり。

- 10月 8日 オリエンテーション
- 10月15日 竹口文博先生（東京医科大学 統合管理室長 / 腎臓内科学分野
医師・弁護士・博士（医学）
「福生病院“事件”とは何だったかー 医と法をめぐる諸課題」（仮）
- 10月22日 前回のテーマに関するディスカッション
- 11月 5日 伊藤伸一先生（秋田県医師会 副会長）
「Narrative Book in Akita の活動と展開」（仮）
- 11月12日 前回のテーマに関するディスカッション
- 11月19日 亀井紗織先生（株式会社 ナースエナジー 代表取締役）
「『飛び出せナース!』を語る」（仮）
- 11月26日 前回のテーマに関するディスカッション
- 12月 3日 神野正博先生（董仙会 恵寿総合病院 理事長）
「医療のDXと震災対策ー 能登半島震災の経験を踏まえて」（仮）
- 12月10日 前回のテーマに関するディスカッション
- 12月17日 勝山貴美子先生（横浜市立大学大学院医学研究科看護管理学分野）
「看護管理と看護倫理」（仮）
- 1月 7日 前回のテーマに関するディスカッション

13文学部 04250043

会田薫子「死生学特殊講義 III」（臨床死生学特論） 2 単位 A1+A2 火 6

臨床死生学と生命倫理・臨床倫理が交差する領域における諸課題の理解と思考力を養うことをめざす。

予定トピック：臨床死生学の射程、生命倫理と医療倫理と臨床倫理の異同、医療とケアの多職種協働、意思決定支援とカンファレンスの方法、臨床死生学の諸課題をひとりひとりの患者/利用者の視点から臨床倫理的に検討（End-of-Life Careの諸問題、緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、延命医療の差し控えおよび終了に関わる問題、「尊厳死」・安楽死・医師による自殺ほう助、脳死、臓器移植など）

14文学部 04250044

早川正祐「死生学特殊講義 IV」（共感とケアの哲学） 2 単位 S1+S2 木 3

臨床や教育、また日常の至る場面において、ケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、その内実には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、現代倫理の鍵概念となった「ケア」について、その複雑さと困難さを尊重する仕方、批判的に考察していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理（Ethics of Care）においてケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任（responsibility）・脆弱性（vulnerability）・依存性（dependency）・受容性（receptivity）といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学（もちろん一枚岩ではないが）に対して、どのような独自の貢献をしようのか

を考察したい。

15文学部 04250045

早川正祐「死生学特殊講義 V」(自律と尊重についての関係的なアプローチ) 2 単位 S1+S2
木 4

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」(relational autonomy)について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的な意思決定プロセス(shared decision-making process)に相応しいものへと発展させる。

16文学部 04250046

早川正祐「死生学特殊講義 VI」(認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開) 2 単位 A1+A2 水 2

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」(epistemic injustice)の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」(epistemic responsibility)の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば——「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病・障がい・性別・性的指向等による差別、またレイシズム等においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視されるかもしれない(「証言をめぐる不正義」)。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない(「解釈をめぐる不正義」)。本講義では、まず主にフェミニスト認識論(ないし社会的認識論)による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、.そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。また私自身の認識的不正義論の展開として、「証言をめぐるタイミング」(testimonial timing)という概念を導入することで、共感知、認識的徳／悪徳また認識的不正義をタイミングの観点から考察したい。

17文学部04250047

乗立雄輝「死生学特殊講義 VII」(死生をめぐる偶然と確率の問題) 2単位 A1+A2 水
4

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのような関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然(性)にまつわる思考が深く関わっている。また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまうたり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。

本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる。

18文学部 04250048

古荘真敬「死生学特殊講義 VIII」(死生をめぐる実存哲学の諸問題) 2単位 S1+S2 金5

われわれが各自のかけがいのない「この身体」のもとに息づき、自身にとって一回的な生を他者たちと共に生き、年老いて、死んでいく、その多様な実存の様相と意味について、とりわけ「可能性」「現実性」「偶然性」といった様相概念に注目しながら、西洋哲学史上のさまざまなテキストを解釈し、考察を展開していく。扱われるテキストは、必ずしもいわゆる「実存哲学」に分類されるものとはかぎらないが、われわれの実存理解の精緻化をめざした解釈を試みていきたい。

19文学部 04250049

堀江宗正「死生学特殊講義IX」(スピリチュアリティ研究) 2単位 A1A2 月6

スピリチュアリティについては、哲学、宗教学、心理学、社会学など、様々な分野から研究が進んでおり、すでに膨大な文献がある。さらに、それは理論的、思想的な側面と、死生学などの臨床場面での応用の面と、ポピュラー文化の現象という面がある。今期はとくに現代的な現象を具体的に知り、それに関する歴史的背景や心理学・社会学による分析・解釈について学び、これらを全肯定も全否定もせず、冷静に議論する姿勢を養いたい。

20文学部04250050

山田慎也「死生学特殊講義X」(葬送儀礼の変容と死生観) 2単位 A1+A2 水2

死に際して行われる葬送儀礼は、人々の死生観とも密接に関連しており、死生学においても重要な課題である。個人化の進む現代においては、葬送儀礼は大きく変容しており、現代の死を考える上でもその動態を含めて総合的に捉えていく必要がある。この講義では、おもに民俗学的な視点から、近現代の日本の葬送儀礼について取り上げていきたい。その際には必要に応じて近代以前の歴史の変遷や、また地域的な多様性についても含めて捉えていくことで、日本における死の文化について検討していきたい。

21文学部04250051

富澤かな「死生学特殊講義XI」（死後観念の比較研究） 2単位 S1S2 月5

死とどう向き合うのか、死別した大切な存在と二度と会うことはできないのか、そもそも死とはなんなのかなど、死をめぐる問いは極めて普遍的なものであり、これに対し、文化や環境により、さまざまなこたえが示されてきた。特に死後の観念は、死に対する問いに加え、この世のあり方への問いとも関わる重要なものである。本講義では世界の多様な死後観念を比較し、理解を深め、その現代的意義を考える。

22文学部04250052

澤井敦「死生学特殊講義XII」（死と不安の社会学） 2単位 A1A2 月2

普段あまり考えることはなくても、何かのきっかけから、自分はなぜ生きているのだろうと「生きる意味」を問う瞬間が誰の人生にもあるだろう。そうした問いについて考える時、「生」には「死」という終わりがあるという事実が否応なく私たちに迫ってくる。

とはいえこの死、とりわけ自分の死について、普段あまり考えることはないかもしれない。ただ、あまり考えることがなくても、死という終焉が必ず訪れるという事実は、漠然とした不安感となって、私たちの生をなかば無意識のうちに覆うものとなる。

哲学・心理学・精神医学などにおいて、以上のような事態はさまざまなかたちで考察されてきた。ただ、この授業でとりわけ焦点を当てたいのは、端的に言えば、死や不安の社会的様相である。

死という不可解かつ不可知の現象は社会的にどのように処理されてきたのか・いるのか、また死を基底とする不安感は社会や文化の変動に応じてどのような様相を呈することになるのか。このような問いについて社会理論の観点から考察することがこの授業の目的である。

23文学部04250071

轟孝夫「応用倫理特殊講義 I」（技術時代の倫理—ハイデガー哲学の視点から）2 単位
A1+A2 月4

本講義では「存在への問い」で知られるドイツの哲学者マルティン・ハイデガーによる戦後の技術論を手引きとして、現代技術の本質とは何か、また現代技術によって規定された社会において可能な「倫理」とはどのようなものかについて考察する。

講義ではまず、ハイデガーの「存在への問い」の基本的内容を『存在と時間』から後期に至るまでの時代的展開に即して概観する。その際、彼の哲学的思索がもつ政治性にとくに注目する。

こうした「存在への問い」の概要の把握に基づいて、講義ではハイデガーが戦後に発表した論文「技術への問い」の講読を行い、彼の技術論の倫理的・政治的含意を明らかにする。

以上のような内容を通して、本講義では現代の「応用倫理学」の本質と限界を浮き彫りにするとともに、今日のわれわれが技術に対していかなる態度を取るべきなのかを考察する。

24文学部04250072

山本剛史「応用倫理特殊講義II」(環境倫理入門) 2単位 A1A2 火3

本年度の授業では、いやしくも環境倫理学と称する学が今後日本で存在し続けるとしたら、どのような学でありうるだろうか、ということを念頭において、2011年に起こった福島第一原子力発電所事故がはらむ諸問題を、被災当事者の証言に基づいて受講生に問題提起していきたい。複数の証言者について検討することを通して、まず原発事故がどのような問題を引き起こしているのかを一定程度具体的に知ることができるだろう。また、受講生の皆さん各自がそういった証言から原発事故が引き起こした問題を評価し、原発事故の解決とは何かを自分なりに提起できるようになることを目指す。

25文学部04250073

福永真弓「応用倫理特殊講義III」(食べることと環境の倫理) 2単位 A1A2 火4

食とは、自然が生み出したものを人間の身体に取り入れる行為であり、身体という場は人と自然が関わる場でもある。また食は、食料を得て加工し食卓に並べるまでの過程も、食べるという行為自体も、きわめて文化的かつ社会的行為である。しかも、グローバルに広がる食の生産・消費・廃棄のシステムに支えられた現代の食において、わたしたちは見知らぬ他者が生きる場と生産・消費・廃棄のシステムを介してつながっている。本講義では、大気海洋システムまでも大きく人間活動に影響を受け、人為起源の生物系群に地球が覆われた人新世時代において、食システムがいかなる変容を求められ、実際に変容しつつあるかを追いかける。そして、よい食とは何かについて、おいしい、健康である、倫理的である、持続可能である、公正である、真正である、など「よさ」を表現する概念と実践をたどりながら考える。それは同時にわたしたちが生きる場所とは何かについて考えることでもある。本講義は二つの目標を設定する。一つは、現在の食システムを理解した上で、よい食とは何かを評価する軸をみずから見だし、実践する方法を探求することができることである。もう一つは、人新世時代において自然らしさ、人間的であるとは何かについて深く考察し、具体的な社会のデザインについて想像する力を得ることである。

26文学部04250074

村上靖彦「応用倫理特殊講義IV」(現象学的質的研究入門) 2単位 S2 集中

現象学的質的研究の方法について学ぶ

27文学部04250075

北條勝貴「応用倫理特殊講義V」(環境文化史から実践するパブリック・ヒストリー) 2単位 S1+S2 月5

近年、歴史学の各分野で、歴史研究・歴史叙述を専門家の独占から解放し、一般社会のひとびととともに考えてゆくパブリック・ヒストリーが盛んになっている。そこでは、史料を読解し過去の事実を云々するだけでなく、わたしたちが直面しているさまざまな現代的問題について、歴史的な知見を援用し解決する方法が模索されている。例えば、災害史の知識は、防災・減災のリスク管理に役立ってくれるのか。伝統や文化財の保全と環境の改変・開発とは、どのように折り合いをつけてゆくべきなのか…。しかし、それらをめぐる合意形成の現場では、負の歴史をめぐる地域住民の悪感情の調整、"Shared Authority"をめぐる葛藤、ポピュリズムやリヴィジョニズムとの対峙など、さ

さまざまな固有のアポリアが横たわっており、容易な解決を許さない。本授業では、担当教員の北條が関わってきたフィールドの諸問題を中心に、教育／研究／社会の交錯するさまざまな事例を検討しつつ、社会生活における〈歴史の応用〉、パブリック・ヒストリーの実践について考えてゆきたい。

また受講生は、以下の到達目標を意識しながら授業に参加すること。

- 1) 高校までの教科書で学んだ歴史が、唯一普遍ではなく仮説に過ぎないことを自覚できるようにする。
- 2) 一国史・人間の歴史という固定的な枠組み（あるいは記憶型の歴史認識）を相対化し、より柔軟で多角的な歴史への眼差し（思考型の歴史認識）を持てるようにする。
- 3) 過去を学ぶことが現在を生きるうえでどのような意味を持つのか、主体的に考えられるようにする。

28文学部 04250076

鈴木晃仁「応用倫理特殊講義VI」（医療者の歴史と倫理） 2単位 A1A2 金4

古代・中世から現在までの医療者（医師や看護師など）の歴史と倫理を講義する

The history and ethics of medical practitioners from the ancient and medieval periods are lectured.

29文学部04250077

小川公代「応用倫理特殊講義VII」（ケアの倫理入門） 2単位 S1S2 木5

本講義では、キャロル・ギリガンが提唱した「ケアの倫理」を起点にしながら、育児、介護、看護等のケア実践のみならず、配慮や思いやりなどのケア精神が文学においていかに表象されてきたかについて考えていく。ギリガンの『もうひとつの声で』（風行社）や『抵抗への参加』（晃洋書房）、ケア・コレクティブ『ケア・宣言 相互依存の政治へ』（大月書店）などの議論を振り返りながら、ギリガンがナラティブ（物語）を用いて「ケア」とは何かを探求していく方法論も見ていく。また、ギリガンに影響を及ぼした作家としては「ケアとジェンダー」の問題意識を創作に活かしたイギリスの作家ヴァージニア・ウルフがいる。この文脈で読める文学としては、ウルフ『灯台へ』、アンネ・フランク『アンネの日記』、松田青子『おばちゃんたちのいるところ』などがあるだろう。この「ケアとジェンダー」以外に、「ケアと他者」「ケアと脆弱性」「ケアと戦争」といったテーマも扱う。具体的には、メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』、シェイクスピア『リア王』、カフカ『変身』、大江健三郎『万延元年のフットボール』、ウルフ『三ギニー』、ハン・ガン『菜食主義』『別れを告げない』などをケアの倫理という切り口で読み解いていく。

30文学部 04250078

堀江宗正「応用倫理特殊講義VIII」（サステナビリティ研究） 2単位 S1+S2 金2

サステナビリティに関わる知識・用語を文理横断的に紹介すると同時に、最終的には人文知の枠組から批判的に研究する態度を養う。

サステナビリティ概念、サステナビリティ正義論、サステナビリティ思想、サステナビリティ経済学、サステナビリティ政治学に分けて論じてゆく。それを通じて、サステナ

ビリティに関わる重要概念についての知識と概念批判の態度を身につけることを目的とする。

31文学部 04250079

富澤かな「応用倫理特殊講義IX」（歴史と宗教と物語） 2単位 A1A2 月5

宗教はさまざまに異なる「時」や「歴史」を語ってきた。そして学問のことばがそれを語る際には、また新しい物語が生まれることとなる。本講義では、宗教と世界観の展開をテーマに、宗教のことばと学問のことばをあわせて考察する。

32教育学部 09251102

大塚類「教育臨床学概説」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ Clinical phenomenology based on specific cases） 2単位 S1+S2 木5

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みます。事例に基づく質的研究の一種だと言えるでしょう。本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げます。講義者が体験したり見聞きしたりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定です（参考資料参照）。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉があります。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋がられるはずです。受講者のみなさんが、自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、みなさんの物事を見る観点や、自己／他者理解が深まることを目指します。

Clinical phenomenology attempts to examine various events that we experience in our daily lives as 'cases' from a phenomenological and philosophical perspective. It is a type of case-based qualitative research. Each lecture in this course will focus on a specific case study related to youth, family and education. Not only events experienced, seen or heard by the lecturer, but also comics, essays, etc. will be taken up as case studies (see references). Phenomenology, the study that seeks to clarify the structure of universal human experience, has a saying that 'the individual leads to the universal'. If we can deeply examine individual concrete cases, we can connect them to a universal understanding of human beings in the form of "I can think of something like that too" or "it might be possible that something like that could happen". The aim is to deepen participants' perspectives on things and their understanding of themselves and others through in-depth discussion of familiar topics that they can relate to as their own personal experiences.

33医学部 02246

池田真理、森崎真由美、村本美由希、福井美苗「家族と健康」 2単位 A 1 月2

時代の変化とともに家族形態は変化し、さまざまな状況・諸問題に応じた援助が家族に必要なっている。さまざまな健康レベルの家族のヘルスニーズや、家族の健康問題によって発生する家族問題を理解し、本来の家族機能を高め、意思を尊重し、健康増進に向かうよう、家族看護の展開を理解する。

【到達目標】

- 1.さまざまな家族の健康問題によって発生する家族の課題と家族看護の必要性、意義について理解できる。
- 2.家族看護の基盤となる家族を捉える諸理論（家族発達理論・家族システム理論・家族ストレス対処理論、他）と、その実践への活用方法を理解できる。
- 3.家族看護の諸理論を説明できる。家族を単位としたアセスメントの方法を理解できる。
- 4.家族看護の展開方法としての家族看護過程を理解できる。
- 5.家族の発達段階に応じた健康問題を説明し、家族に対する援助の方向性を説明できる。

34医学部 02218

瀧本禎之、中澤栄輔「生命・医療倫理Ⅰ」 2単位 A 2 金1+2

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に保健医療や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

35農学部 060500031

根本圭介「技術倫理」 1単位 A2 月5

36農学部 060500021

芳賀猛「生命倫理」 1単位 S1 月5

我々は皆、他の「命」をいただいて、生かされている存在である。人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由で、ヒトや動物の命の扱い方が異なっている。本講義では、人の生命や死に関わる倫理上の問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな「生命」との関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として、多層な生命をどう秩序立てて理解し、どのように人類の幸福を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

37教養学部 08F1304

小松美彦「科学技術リテラシー論Ⅱ」（日本における精神障害者と優生政策） 2単位 S1+S2
金4

日本の特に昭和期における、精神障害者に対する認識と優生政策の歴史を検討する。

検討の中心は、「国民優生法」（1940年）と「優生保護法」（1948年）の制定をめぐる議論であり、そこへの精神医学者たちの関与である。また、その際、遺伝研究がどのように関係していたかである。さらには、優生主義者でない者が優生手術（断種手術）に向かった背景・動機を考察する。そこには優生政策に対する紋切り型の批判ではすまない深刻な問題が潜んでおり、その

克服を目指さないかぎり優生問題の解体はないだろう。

視点を転ずると、以上は精神障害と優生学に関する科学コミュニケーション論の問題でもある。この問題を歴史的に検討することもまた、本講の目的となる。

38教養学部 08D1002

石原孝二「応用倫理学概論[科学技術論コース] 2単位 集中 未定

応用倫理学の基礎と諸領域に関する理解を得て、応用倫理学に関する議論を行えるようにする。

39教養学部 08F1003

石原孝二「応用倫理学概論[グローバル・エシックス] 2単位 集中 未定

応用倫理学の基礎と諸領域に関する理解を得て、応用倫理学に関する議論を行えるようにする。

以上